

## 〔所 感〕

長崎市議会議員 緒方 富昭

今回、欧州視察の機会を得て、ドイツ、スイス、フランスの三か国の環境問題を中心に多くのことを視察・調査が出来ましたことは極めて貴重なものでありました。『百聞は一見に如かず』の言葉どおりであり、実際に自分の目で見る事が出来ました。また、各国々の壮大な歴史と文化、また人々に触れ合う事が出来、実りの多い視察であったと考えます。

私は、さまざまな文献で紹介されているドイツのごみ政策は、国レベルにおける廃棄物規制は、EU 法の影響などもあり、だんだんと強くなっている事を感じた。廃棄物法規はEU・国・州・市の階層構造になっていて、EUもしくは国の法で枠組を定めて、州・市レベルで具体化されているようであり、分別化による再資源化はもとより、焼却よりもエネルギーとしての再利用が重視され徹底されていることを強く感じました。

次に、カールスルーエ市では、市景観計画部を（長崎市で言えば都市計画部と道路公園部）訪問したが、特に緑のネットワークづくりによる自然の再生事業に興味を持った。都市に住んでも緑豊かな歩道があり、近くには大きな公園がいたるところにあり、緑豊かな住環境が醸し出されていた。また、米軍から返還された飛行場跡地の広大な土地を緑豊かにして、そこに生物が育む環境づくりが進められていた。さらに驚いたのは緑化保全や拡大のため、工場跡地などを市が買収し、その政策が進められていることであります。日本では空き地があれば、すぐ土地利用を考えがちですが、また世界には未だに焼畑農業を行っている国々がある中で、その政策そのものに感心させられました。



地下駐車場上の公園（緑化）



フランクフルト近郊清掃処理場

スイスのベルン市では、ベルン州の環境部を訪問し、世界遺産のベルン市を過去の洪水の教訓からアルプス山脈からの急流洪水の水害から守るため、上流のアーレ川の長期

間を要する壮大な改修事業であるが、川30キロの長さの急流を自然の流れを活用し川の流れを緩やかにするための気の遠くなるような改修事業であった。

また、ベルンの世界遺産は都市全体が遺産となっており、11世紀頃の建築物は当時では考えられないような広い道路や都市空間は現在でも通用するようなものであり、当時の街並みは遺産にふさわしい超一流のものであった。

スイスからフランスまで特急列車TGVで移動したが、日本の新幹線が快適ですべての面で優れている事を実感しました。パリ市内調査では、再開発地区を調査しましたが、パリ市内では伝統的建造物や景観保護のため市内中心部から、十数キロ離れたデファレンス地区に高層ビルなどが集積していた。50年前からの計画で欧州ならではの長期的視野に立った都市計画であった。

また、フランスでは水利整備広域行政事務組合の下水処理場の調査を行いました。欧州は石の文化であり、石の採掘のため以前は雨水と汚水を同時に処理するための日本のトンネルみたいな大きな下水道を想像していたが、分離方式で汚水のみ処理場であったが下水処理のみでなく、化学薬品などの公害防止、環境問題、防災機能なども視野に入れた広域事務組合の幅広い業務が特徴的であった。

同僚議員との欧州での調査・研究は短い期間ではありましたが、異国の歴史や文化・芸術、国民性の違い、多くの人々に触れ合うことが出来たことは大いに意義のある研修でありました事を報告し、所感に代えさせていただきます。